

【寝物語】ねものがたり

司馬遼太郎の『街道をゆく』に気になる一節がありました。

寝ながら会話することを意味する「寝物語」が地名になっているというのです。

「ねものがたりの里 など、地名として、一見、ありうべきでなさそうに思えるが、しかし中世にも存在し、近世ではこの地名を知っていることが、京の茶人仲間では、いわば教養の範囲に属した。」同書 24 近江散歩 2 寝物語の里

その寝物語の里は美濃(岐阜県)と近江(滋賀県)の境にあます。

<http://www.konoha-house.com/nakasendo/n601nemonogatari.htm>

司馬氏の同書に紹介されている通り、その村には川ともいえないほどの細い溝が流れ、昔はこの溝が美濃と近江の国境になっていたそうです。昔は家屋が溝を挟んで隣接し、この溝に隣接する民家は壁ひとつ隔てて夜中に会話ができたとのことです。

これが寝物語の里の名の由来です。

江戸時代の美濃と近江の国境は江戸を中心とした金本位制の経済圏と、大阪・京都を中心とした銀本位制の経済圏の境でもあったそうです。

『近江国輿地志略』(1734年)によれば、国境であるこの村の溝が両経済圏の境であるばかりか、方言の境でもあったということでした。

経済圏・言語圏など現地に縄を張るような細密な区分けができるものなのか甚だ疑問ですが、事実はさておいて、そのような国境を挟みながら寝物語ができたとする伝えは伝えとして何とも面白い話ですね。

では何故「近世ではこの地名を知っていることが、京の茶人仲間では、いわば教養の範囲に属した」のでしょうか。

そのヒントは司馬氏の同書にありました。司馬氏がかつて井口海仙宗匠(裏千家十四世淡々斎実弟)に「寝物語」という銘の茶杓を紹介されたことを思い出し「その茶杓は、一本は美濃の竹でつくられ、一本は近江の竹でつくられていて、一つの筒におさめられている。それを『寝物語』と銘打ったことから名物になった、という。いつ、だれの作だったかは、忘れた。」と回想しています。

私の知る限り、この茶杓は裏千家四世仙叟宗室作の茶杓と思われまます。

『寝物語』という銘の面白さが京の茶人たちの心を捉え評判となり、銘の根拠、つまり地名を知らなければ話題についていけなかったからこそ、「いわば教養の範囲に属した」のではないのでしょうか。

この里は以前あった寺の名から「長久寺村」またの名を「丈くらべの里」ともいったそうです。周りの山々が背丈を比べているようだからとか、周辺の寺の僧侶らが碩学を争ったことを「己がたけくらべ」といったとか…。確かな由来は分かっていません。

もしも仙叟の二本の茶杓に因み「竹比べ」と名が付いたのであれば、茶の湯を嗜む者にとって実に面白い話となるのですが、この珍説は私の勝手な期待にすぎないのでしょうか。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~